

第一コリント書における神の問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24416

第一コリント書における神の問題*

原 口 尚 彰

はじめに

新約聖書は体系的な神についての教説を展開しているのではなく、旧約・ユダヤ教の神理解を前提にした上で、折に触れて神の業について言及するに留まる。イエスは、神の支配の到来をその宣教の中心に置き、聴衆に回心を迫った(マタ 4: 17; マコ 1: 14-15)。イエスはまた神の支配につき、民衆の日常生活に素材を採った喩え話を語った(マタ 13: 3-58; マコ 4: 3-41)。イエスはさらに、自然世界に働く創造主の配慮に聴衆の注意を促した(マタ 6: 26-30)。さらに、ゲツセマネの祈りにおいてイエスは神をアッパ(父)と呼び、神の存在の近さを示した(マタ 26: 39; マコ 14: 36)¹。これに対してパウロは、キリストにおける神の決定的行動という視点から(ロマ 3: 21-26; 5: 1-11; I コリ 1: 18-25; 6: 14; 15: 15 他)、創造主や、歴史の主、救いの神という諸主題を解釈し、神の業と世界の救いを語る²。そのため、新

* 本稿は、2005年6月18日に盛岡大学で行われた、日本基督教学会第38回東北支部会において行った口頭発表に加筆したものである。

¹ J.M. Bassler, "God in the NT," *ABD* 2. 1049; H.D. Betz, "θεός," *EWNT* 2. 349-350; C. Demke, "Gott IV. Neues Testament," *TRE* 13. 647-649; A. Lindemann, "Gott. III. Neues Testament," *RGK*⁴ 4.1105 を参照。

² J.M. Bassler, "God in the NT," *ABD* 2. 1049-50; H.D. Betz, "θεός," *EWNT* 2.351; C. Demke, "Gott IV. Neues Testament," *TRE* 13.646-647; H. Kleinknecht et al., "θεός," *ThWNT* 23.65-120; A. Lindemann, "Gott. III. Neues Testament," *RGK*⁴ 4.1106 を参照。

約神学研究において神についての考察は、キリスト論や救済論の背後に退くことがしばしばであった。しかし、パウロにおける神についての言説は、キリスト論や救済と密接な関係を持つにしても、それからは独立な考察対象になりうる重要な事柄である。

本研究では、パウロにおける神の問題を論じる一環として、第一コリント書における神の問題を採り上げて考察する。この書簡においてパウロは、神の知恵・力の啓示としての十字架の言葉という(Ⅰコリ 1: 18-25)、パウロ固有の啓示理解を示す主題を論じており、第一コリント書はパウロの神理解全体を読み解く鍵を提供しているからである³。

1. 神の知恵・力の啓示としての十字架の言葉(Ⅰコリ 1: 18-25)⁴

パウロはコリントにおける伝道説教において、ガラテヤ伝道におけると同様に(ガラ 3: 1-5)、十字架に架けられたキリストを宣べ伝えていた(Ⅰコリ 1: 23; 2: 1-5)。彼は回顧しつつ、「私はあなた方の間で

³ P.-G. Klumbies, *Die Rede von Gott bei Paulus in ihrem zeitgeschichtlichen Kontext* (FRLANT 155; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992) は、パウロの神についての言説がキリスト論と表裏一体であることを明らかにしているが、神の行動にばかり関心を集中し、認識論的側面に関心がなかったために、Ⅰコリ 1: 18-25 を本格的な分析対象としていない。

⁴ Ⅰコリ 1: 18-31 の詳しい釈義的分析は、C.K. Barrett, *The First Epistle to the Corinthians* (London: Black, 1968) 50-56; R.F. Collins, *First Corinthians* (Sacra Pagina 7; Collegeville, MN: The Liturgical Press, 1999) 86-111; H. Conzelmann, *Der erste Brief an die Korinther* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981) 58-69; E. Fascher, *Der erste Brief an die Korinther* (ThH-KNT 7/1-2; 4. Aufl.; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1988) 96-104; G. D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1987)

は、キリスト、しかも十字架に架けられたキリストしか知るまいと決心した」と語るのである(Ⅰコリ2:3)。しかし、パウロが去った後にコリントには争いが生じた(1:10-17)。それは直接には、どの宣教者によって信仰に導かれ、洗礼を受けたかということに起因する派閥抗争であったが(1:10-16)、パウロはその根底に宣教者個人の知識や人間的能力に依拠することによって、キリストの十字架の使信を空しくする危険を見て取った(1:17)。パウロはコリント人たちに、かつて伝道説教の中で語った十字架に架けられたキリストのケリュグマを再度想起するように促している。パウロによれば、十字架に架けられたキリストを救い主として宣べ伝える十字架の言葉は、神が自己を啓示

66-78; D. Garland, *1 Corinthians* (Grand Rapids: Baker, 2003) 59-72; H.J. Klauck, *Der erste Brief an die Korinther* (2. Aufl.; Würzburg: Echter Verlag, 1987) 24-25; F. Lang, *Die Briefe an die Korinther* (NTD 7; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986) 27-32; H. Lietzmann, *Der erste Brief an die Korinther I/II* (HbNT 9; 5. Aufl.; Tübingen: J.C.B. Mohr, 1969) 8-10; H. Merkley, *Der erste Brief an die Korinther* (OTKNT 7/1-2; Gütersloh: G. Mohn, 1992-2000) 1.167-191; A. Robertson and A. Plummer, *A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle to the Corinthians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1911) 16-24; W. Schrage, *Der erste Brief an die Korinther* (EKK 7/1-4; 4 Bände; Zürich-Braunschweig: Benzinger Verlag; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991-2002) 1.165-203; A. Strobel, *Der erste Brief an die Korinther* (ZBK6.1; Zürich: Theologischer Verlag, 1989) 45-53; A.C. Thiselton, *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 2000) 150-175; B. Witherington III, *Conflict & Community in Corinth: A Socio Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995) 106-120; C. Wolff, *Der erste Brief an die Korinther* (ThHKNT 7; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1996) 34-41; F. Vos, *Das Wort vom Kreuz und die menschliche Vernunft. Zur Soteriologie des 1. Korintherbriefes* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002) 361-108; H. Weder, *Das Wort Jesu bei Paulus. Ein Versuch, über den Geschichtsbezug des christlichen Glaubens nachzudenken* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981) 137-156; H. Ch. Kammler, *Kreuz und Weisheit* (WUNT 93; Tübingen: Mohr, 1997) 50-123 を参照。

する神の知恵であり、信じる者を救いへと導く神の力である (1: 18, 21, 24, 25, 30)。十字架の言葉が神の力であることは、信じて救われる者には理解されるが、信じず、救われていない者には、愚かなものしか見えないのである。パウロはここで、キリストの十字架を救いの根拠とするだけでなく、神について知る認識を与える手段としている⁵。パウロにおいて十字架論は救済論の問題であると共に、神が自己を啓示する啓示論と神を知る認識論の問題となっているのである。

十字架の言葉は、神認識の試金石である。キリストの十字架において神の業と救いの成就を見ることは、しるしとして力ある業を求めるユダヤ的なメシア観には躓きであり、知恵を求めるギリシア・ローマ的知性にとっては愚かさそのものであった (1: 18)。十字架に架けられたキリスト (メシア) とは、ユダヤ的な理解によれば形容矛盾である。メシア運動に失敗して処刑された者は、メシア潜称者に過ぎず、結局のところメシアではなかったことを示すと考えられたからである (マコ 15: 29-32 並行を参照)⁶。ユダヤ的な理解によれば、メシアとは、敵を打ち倒して、ユダヤの国を解放しなければならない (ソロ詩 17: 21-46; ルカ 24: 19)。メシアは力あるしるしによって神から遣わされた者としての正統性を証明出来る者でなければならない (マコ 8: 11 並行)。他方、ギリシア・ローマ世界において十字架刑は、支配者が反逆者に対して課した残酷な極刑であり、十字架は死刑の道具としておぞましい陰鬱なイメージを持たれていた⁷。ギリシア・ローマ的知性に

⁵ Thieselton, 158; Vos, 63.

⁶ この点については、拙稿「パウロ書簡における十字架の躓き」『パウロの宣教』教文館、1998年83-102頁を参照。

⁷ M. Hengel, "Mors turpissima crucis. Die Kreuzigung in der antiken Welt

とって、十字架上に刑死した者を救い主として信じるキリスト教は「有害極まる迷信」であり、愚かさの極致に見えたのである（タキトゥス『年代記』15.44；小ブリニウス『書簡集』10.96.8を参照）。この世の知恵はキリストの十字架の内に神の知恵と力を認識することが出来なかった（I コリ 1：21；2：8）。十字架における神の知恵と力の啓示は、こうしてこの世の知恵に対する裁きとなった（1：20-21）⁸。自然世界に内在する法則性を探求し、歴史世界の出来事を分析するこの世の知恵には、十字架に救いの出来事を見る可能性は開けていなかった。この世の知恵がキリストの十字架の救済論意義を認識することが出来ないのは、この出来事が従来の世界の常識を越えた全く新しい終末的出来事であるからである⁹。このことは、神を認識する根拠は人間の知性ではなく、神の自己啓示にあることを示す。十字架における神の力の啓示を理解する能力は自然の人間のうちにはない（ロマ 11：33を参照）。神についての認識は、神の救いの業に与ることを通して与えられる。神認識は、神の知恵を極める聖霊によって恵みとして与えられるしかないのである（I コリ 2：10-16）¹⁰。

und die »Torheit« des »Wortes vom Kreuz« in *Rechtfertigung* (FS. E. Käsemann; Tübingen: Mohr, 1976) 125-184 (=土岐正策・土岐健治訳「十字架：その歴史的探求」ヨルダン社, 1983年); H.W. Kuhn, "Kreuzesstrafe während der frühen Kaiserzeit. Ihre Wirklichkeit und Wertung in der Umwelt des Christentums," *ANRW* II 25.1, 648-793を参照。

⁸ Weder, 144-147; Merklein, 179; Schrage, 1.175; Kammler, 112.

⁹ Conzelmann, 65; Kammler, 88-92; Schrage, 1.190; Merklein, 220; H. Hahn, *Theologie des Neuen Testaments* (2 Bände; Tübingen: Mohr, 2002) 2. 152.

¹⁰ Merklein, 218; Weder, 171-172; Hahn, 2.149; U. Wilckens, *Theologie des Neuen Testaments* (Bd.1/1-3; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2002-2005) 1/3, 76-77.

2. 唯一の神

2.1 唯一神論

パウロはコリント人に対して、「一人の方以外に神はいない」(I コリ 8: 4)、さらに、「私たちにとって、父なる神は唯一であり、すべては神から出ており、私たちも神のために存在する」と述べる(8: 6)。神の唯一性ということは、パウロと手紙の読者であるコリント人たちの間に共通な認識であり、パウロが最初のコリント伝道の時に伝えたことと推定される¹¹。異教の神々は神ではなく人間の手が造った人工物であるから、異教の神像に献げた肉を食べても偶像礼拝にならないというコリント人の一部の議論に対して、パウロはその認識は間違っていないが、そのような認識を持たない他の信徒を躰かせる危険を指摘して、愛に基づいて行動を自重するように勧める(8: 7-13; さらに 10: 28-29 も参照)¹²。

「神は唯一である」という言葉は、「聞け、イスラエル。主は私たちの神であり、主は唯一である」という申命記 6: 4 の言葉に由来する¹³。但し、申命記は主以外の神々の実在を必ずしも否定しておらず、この言葉は十戒における他の神々を礼拝することの禁止と同様に、主のみ

¹¹ Garland, 367; Wilckens, 1/3. 87-88.

¹² Wilckens, 1/3.89; Klauck, 60; A. Lindemann, "Die Rede von Gott in der paulinischen Theologie," idem., *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr, 1999) 16; E.-M. Becker, "ΕΙΣ ΘΕΟΣ und 1 Kor 8. Zur frühchristlichen Entwicklung und Funktion des Monotheismus," *Ein Gott und ein Herr. Zum Kontext des Monotheismus im Neuen Testament* (hrsg v. W. Popkes/R. Brucker. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2004) 75-78 参照。

¹³ 申命記 6: 4 は、共観福音書伝承にも引用されている(マコ 12: 29 を参照)。

を拝し、主のみに仕えることを求めるに留まる(出 20: 2-6; 申 5: 6-10)。イスラエルにおいて唯一神論の確立が確認されるのは、第二イザヤの時であり、この預言者は主以外の神は存在しないことを明確に述べている(イザ 43: 10; 45: 5, 14-25; 46: 9)¹⁴。

第二イザヤの唯一神論は初期ユダヤ教に継承され、ヘレニズム・ユダヤ教文献にしばしば言及される(シビュラ 3: 11-16; ヨセフス『古代誌』4.201; 5.112; 8.335; フィロン『十戒総論』64; 『ガイウス』115; 『世界の創造について』170-172 他)。特に、ソロモンの知恵 13 章は、異教の神々は人間がその意匠に従って造った偶像であり、人を救う力を持たないことを指摘し、異邦人社会の倫理的混乱の根本原因を真の神を知らず、偶像礼拝に耽ること見て非難している。唯一神論を初代教会がヘレニズム・ユダヤ教を介して継承したことを、ロマ 1: 18-32; 3: 30; 使 14: 16; 17: 23-30; I コリ 8: 4-6; I テサ 1: 9-10; ヘブ 6: 1 等の箇所が示唆している¹⁵。ヘレニズム教会の異邦人向けの伝道説教は、創り主について語ることと(使 14: 15-16; 17: 24-27)、異教の神々に仕えることから生ける真の神に立ち帰ることを中心的な主題として含んでいた(使 14: 14-15; ロマ 1: 23; I テサ 1: 9-10; ヘブ 6: 1)¹⁶。パウロはコリント伝道において、十字架に架けられたキリス

¹⁴ B. Lang, "Zur Entstehung des biblischen Monotheismus," *ThQ* 166 (1986) 135-142. G. von Rad, *Theologie des Alten Testaments* (2 Bände; München: Kaiser, 1960-1962) 2.223-225, 240; J.J. Scullion, "God in the OT," *ABD* 2.1041-1048; Conzelmann, 88; Schrage, 2.237.

¹⁵ Bultmann, R. *Theologie des Neuen Testaments* (9.Aufl. durchgesehen und ergänzt v. O. Merk; Tübingen: Mohr, 1984) 69-73 を参照。

¹⁶ Bultmann, 68-72; Merklein, 2.184; Hahn, 1, 166-167; Wilckens, 1/2.54-55.

トを宣べ伝えたが(I コリ 1: 23; 2: 1-5), キリストを信じるとは救いのためにキリストを世に遣わし(ロマ 8: 3), 十字架に架けた神を信じることであり, この神は唯一の方なのであった(I コリ 8: 6)。同様なことは, パウロのガラテヤ伝道についても言える(ガラ 3: 1-5; 4: 8-9)。この唯一の神を知り, 神を愛するとは, 同時に神に知られることであり, この排他的関係は他の神々を礼拝することからの解放をもたらしたのであった(I コリ 8: 3; ガラ 4: 8-9)¹⁷。

2.2 唯一の神と唯一の主イエス・キリスト (I コリ 8: 4-6; cf. エフェ 4: 5-6)¹⁸

I コリ 8: 6 においてパウロは, 「私たちにとって, 父なる神は唯一であり, すべては神から出ており, 私たちも神のために存在する」と述べた後(ロマ 11: 36 も参照), 直ぐに「主イエス・キリストは唯一であり, すべてはキリストによって存在しており, 私たちもキリストによって存在している」と述べる。ここでパウロが引用する信仰告白伝承の背後にある論理は, 神が唯一であるのと同様に主イエス・キリストも一人であり, 神はキリストを通して世界を創造したのであり(ヨハ 1: 3; ヘブ 1: 2 を参照), 万物は神のために存在し, 私たちはキリストを通して救われたということである¹⁹。創造主である神の唯一性

¹⁷ Bultmann, 71; Schrage, 2. 233-235; Garland, 370-371.

¹⁸ I コリ 8: 4-6 の詳しい釈義的分析は, Barrett, 191-193; Collins, 313-321; Conzelmann, 176-180; Fee, 369-376; Garland, 363-377; Klauck, 60-62; Lang, 27-32; Lietzmann, 37-38; Merklein, 2.183-192; Robertson and Plummer, 166-168; Schrage, 2.235-251; Strobel, 132-137; Thiselton, 150-175; Witherington III, 197-198; Wolff, 34-41 を参照。

¹⁹ Barrett, 192-193; Fee, 374; Schrage, 2.243-245; Merklein, 2.189.

と創造と救済の仲介者であるキリストの唯一性は密接不可分なものと捉えられ、神論とキリスト論は表裏一体の事柄となっている²⁰。

3. 創造主 (I コリ 8: 6; cf. 使 1: 15-17; 17: 22-31; ロマ 11: 36; エフェ 4: 5-6)

ユダヤ人信徒であるパウロは、神が創造主であることを当然の前提にしている。彼は創世記の記述を基礎に神の言葉による光の創造を論じ (II コリ 4: 6; 創 1: 3)、人類の始祖アダムの創造に言及する (I コリ 15: 45-49; 創 2: 6-7)。彼は旧約聖書の創造論からさらに進んで、無からの創造 (*creatio ex nihilo*) を論じている (ロマ 4: 17)²¹。第一コリント書においてパウロは、特にキリストの復活と終末時における死者の復活の希望について論じる文脈で神の創造について言及する。それはコリントの信徒たちの間に終末時の死者の復活は無いと論じる者が出てきたので (I コリ 15: 12)、伝道の時に伝えたキリストの死と復活を告げる信仰告白伝承を再度想起するように促した上で (15: 3-7)、神の再創造の業として死者の復活の事柄を詳しく論じる (15: 20-58)²²。パウロによれば、天地創造に際して最初の人アダムを創った神は (創 2: 6-7)、第二のアダムであるキリストを霊の体に復活させた (I

²⁰ Lindemann, 18; Klumbies, 129-130; 151-153; Hahn, 2.161; Becker, 84-85; L. Hurtado, *One God, One Lord: Early Christian Devotion and Monotheism* (2nd ed.; Philadelphia: Fortress; Edinburgh: T. & T. Clark, 1988) 17-39 を参照。

²¹ 詳しくは、「パウロにおける *Creatio ex nihilo*: ローマ書 4 章 17 節後半について」『パウロの宣教』教文館、1998 年 170-175 頁を参照。

²² Klumbies, 153-154.

コリ 15: 20-28, 42-49)。キリストの復活は神の業であり、信仰者が終末の時に神の力によって復活する希望の根拠である (I コリ 6: 14; 15: 15)。最初の人アダム の罪によって死が世界に入ったように、キリストによって復活が世にもたらされた (I コリ 15: 21; さらに、ロマ 5: 17 も参照)。キリストは初穂 (*ἀπαρχή*) として甦ったのであり、すべての者はキリストにあつて死者の復活の希望を持つ (I コリ 15: 22)。人間の究極的救いの希望の根拠は、無から有を創造し (ロマ 4: 17)、死者を復活させる創造主の力にあることになる (I コリ 15: 15-16)²³。

4. 神の真実 (信実) (I コリ 1: 9; 10: 13)

(1) 神の教会

I コリント書においてパウロは、教会が「神の教会 (*ἡ ἐκκλησία τοῦ θεοῦ*)」であると述べる (I コリ 1: 2; 10: 32; 11: 16, 22; 15: 9)。これは、聖徒の交わりである教会は、神が信徒たちをこの世から呼び集めることによって成り立つという理解を反映している。従つて、信徒を迫害することは、神の教会を迫害することになるし (15: 9)、信徒たちに配慮することは神の教会のためであり、神の栄光のために行ふこととなる (10: 32)。教会を指導する宣教者たちは神に奉仕する者であり、神から宣教の業を託された者である (1: 5)。宣教者たちが行ふ宣教活動を通して教会は成長するが、宣教は宣教者たちを通して行ふ

²³ Lindemann, 26; Klumbies, 163 を参照。

神の業であり、「成長させて下さるのは神である」(1: 7)。

パウロはIコリント書冒頭の序言を、「私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平和があなた方にあるように」という言葉によって締め括っている(Iコリ1: 3; さらに、ロマ1: 1; 15: 6; IIコリ1: 3を参照)²⁴。これは初代教会の礼拝に由来する祝祷句であり、教会に神とキリストが臨在し、その恵みと平安が礼拝を通して与えられることを祈願している。この句は恵みと平和を与える主体として父なる神と主イエス・キリストとを挙げているが、IIコリント書の結びに引用されているより完成した祝祷句では、父なる神とキリストと聖霊を恵みと愛と交わりを与える主体として挙げる(IIコリ13: 13「主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の交わりがあなた方一同と共にあるように」)。

(2) 神の真実(信実)

Iコリント書においてパウロは神の真実(信実)ということに言及する(Iコリ1: 9; 10: 13)。神の真実(信実)は旧約聖書に由来する主題であり、新約文書がこの概念に言及する時は旧約的理解を前提にキリスト論的な考察を加えている。神の真実性についての議論は、旧約聖書においては契約神学的な基礎を持っている²⁵。申命記において、神はイスラエルの父祖たちに与えた契約や(申7: 9; 32: 4)、約束の言

²⁴ この句の書簡論的・修辭学的分析については、拙稿「真正パウロ書簡導入部の修辭学的分析」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第18号(2000年)34-35頁を参照。

²⁵ 拙稿「パウロにおける *πιστὸς ὁ θεός/πίστις τοῦ θεοῦ*」『パウロの宣教』教文館、1998年203-207頁を参照。

葉を(詩 145 [144]: 13 LXX) 守るので、神は真実である(אֱמֻנָה; πιστός)とされる。他方、第二イザヤは、真実の神がイスラエルを選んだことの内に、イスラエルの救いの希望の根拠を見ている(イザ 49: 7-9)。

パウロは、I コリント書冒頭で、「キリストとの交わりへの召した神は真実である」と述べる(I コリ 1: 9)²⁶。神が真実であるのは、神がイエス・キリストの福音を通して信徒たちをキリストとの交わりに招き入れ、さらには、キリストを通して彼らを究極の救いへと召し、終わりの時にそれを実現されるからであると考えられる(I テサ 5: 24; ヘブ 10: 23 を参照)²⁷。キリストは信徒たちの救いが実現するように、彼らを終わりの日に到るまで支えるのである(I コリ 1: 8)。ここでは、救いの約束を守って実現する神の真実と、それを仲介するキリストの働きとが短く言及されている。

I コリ 10: 13 においてパウロは、「神は真実であり、耐えることが出来る以上の試練にあなた方を会わせることなく、試練と共に耐えることが出来る逃れの道を作って下さるであろう」と述べる。I コリント 10 章前半においてパウロは、コリント教会の信徒たちの中に、異教の神々に献げられた肉を食することにより、混乱を起こしている者たちがいることを念頭に置きながら(I コリ 10: 14-22)、イスラエルの歴史にお

²⁶ I コリ 1: 9 の詳しい釈義的分析は、Barrett, 39-40; Collins, 65-66; Conzelmann, 47; Fee, 44-47; Garland, 35; Klauck, 60-61; Lang, 18 19; Lietzmann, 5-6; Merklein, 1.93-94; Robertson and Plummer, 8; Schrage, 1.123-124; Strobel, 32; Thiselton, 103-105; Witherington III, 82-93; Wolff, 23 を参照。

²⁷ 拙稿「パウロにおける πιστός ó θεός/πίστις τοῦ θεοῦ」[パウロの宣教] 教文館, 1998 年 206-207 頁を参照。

いて出エジプトの後の荒野の世代の中に偶像礼拝の罪を犯したために滅びた者たちがある事例を、終末の時に臨んでいるキリスト教徒への警告として言及している(10: 1-13)²⁸。I コリ 10: 13 は、神は信徒を耐えることの出来ないような試練に会わせることのないと述べるのであるが、その根拠は救いの約束を守り、信徒に究極的な救いの希望を与える神の真実とされている²⁹。この見方は、試練に際しても信仰を貫く信仰者の側の真実を強調する初期ユダヤ教やキリスト教文書とは極めて対照的である(シラ 44: 20; マカ 2: 52; ヘブ 6: 12; 11: 7; 13: 7; I ペト 1: 9; 黙 2: 10, 13, 19; 13: 10 他)³⁰。

5. 結論と展望

これまでの考察を通して、第一コリント書においてパウロが神を論じる際は、(1) 神を知る認識論としての十字架論、(2) 神論とキリスト論の不可分性、(3) 旧約聖書の終末論的再解釈、(4) 救済論的等の特色があることが分かる。

(1) パウロ神学においてキリストの十字架は、救いの根拠であるだ

²⁸ I コリ 10: 1-13 の詳しい釈義的分析は、Barrett, 218-229; Collins, 363-374; Conzelmann, 201-208; Fee, 441-462; Garland, 438-471; Klauck, 70-73; Kremer, Lang, 108-111; Lietzmann, 44-47; Merklein, 2.183-192; Robertson and Plummer, 198-210; Schrage, 2.380-429; Strobel, 152-157; Thiselton, 719-749; Witherington III, 217-224; Wolff, 208-225 を参照。

²⁹ 拙稿「パウロにおける *πιστὸς ὁ θεὸς/πίστις τοῦ θεοῦ*」『パウロの宣教』教文館, 1998 年 207-208 頁を参照。

³⁰ 同 208 頁を参照。

けでなく、神について知る認識根拠でもある(Ⅰコリ 1: 18-25)。つまり、パウロにおいて十字架論はキリスト論の問題であると共に、神が自己を啓示する啓示論と神を知る認識論の問題であり、神について論じる出発点である。しかし、十字架の言葉は信じる者に救いを得させる神の知恵、神の力であったが、ユダヤ的なメシア観には贅きであり、ギリシア・ローマ的知性にとっては愚かであった(1: 18)。従って、十字架における神の知恵と力の啓示は、この世の知恵に対する裁きとなった(1: 20-21)。

(2) Ⅰコリ 8: 6においてパウロは、神が唯一であるのと同様に主イエス・キリストも一人であることを述べる。創造主である神の唯一性と世界の創造と救済の仲介者であるキリストの唯一性は密接不可分なものと捉えられ、神論とキリスト論は表裏一体の事柄となっている。神は信じる者を救いに招くのであるが、それを神は彼らをキリストとの交わりに招き入れることを通して行う(Ⅰコリ 1: 9)。天地の創造におけると同様に、救いにおいてもキリストの仲介が不可欠になるのである。

(3) 第一コリント書においてパウロは、特にキリストの復活と終末時における死者の復活の希望について論じる文脈で創世記の神の創造についての記事に言及する(15: 20-58)。天地創造に際して最初の人アダムを創った神は(創 2: 6-7)、第二のアダムであるキリストを霊の体に復活させた(Ⅰコリ 15: 20-28, 42-49)。キリストの復活は神の業であり、信仰者が終末の時に神の力によって復活する希望の根拠であ

る(Ⅰコリ 6: 14; 15: 15)。人間の究極的救いの希望の根拠は、無から有を創造し、死者を復活させる創造主の力にあることになる。

(4) Ⅰコリント 10 章前半においてパウロは、イスラエルの歴史において出エジプトの後の荒野の世代の中に偶像礼拝の罪を犯したために滅びた者たちがある事例を、終末の時に臨んでいるキリスト教徒への警告として言及している(Ⅰコリ 10: 1-13)。Ⅰコリ 10: 13 は、神は信徒を耐えることの出来ないような試練に会わせることのないと述べるのであるが、その根拠は救いの約束を守り、信徒に究極的な救いの希望を与える神の真実とされている。神を論じるパウロの思考は徹頭徹尾救済論的であり、信じる者の究極的救いということに最終的な関心がある。

参 考 文 献

a. 注解書

- Barrett, C.K. *The First Epistle to the Corinthians* (London: Black, 1968).
- Collins, R.F. *First Corinthians* (Sacra Pagina 7; Collegeville, MN: The Liturgical Press, 1999).
- Conzelmann, H. *Der erste Brief an die Korinther* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981).
- Fascher, E. *Der erste Brief an die Korinther* (ThHKNT 7/1 2; 4. Aufl.; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1988).
- Fee, G.D. *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1987).
- Garland, D. *1 Corinthians* (Grand Rapids: Baker, 2003).

- Klauck, H.J. *Der erste Brief an die Korinther* (2. Aufl.; Würzburg: Echter Verlag, 1987).
- Kremer, J. *Der erste Brief an die Korinther* (Regensburg: Pustet, 1997).
- Lang, F. *Die Briefe an die Korinther* (NTD 7; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986).
- Lietzmann, H. *Der erste Brief an die Korinther I/II* (HbNT 9; 5. Aufl.; Tübingen: J. C. B. Mohr, 1969).
- Merklein, H. *Der erste Brief an die Korinther* (OTKNT 7/1-2; 2 Bände.; Gütersloh: G. Mohn, 1992-2000).
- Robertson, A./A. Plummer, *A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle to the Corinthians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1911).
- Schrage, W. *Der erste Brief an die Korinther* (EKK 7/1-4; 4 Bände; Zürig Braunschweig: Benzinger Verlag; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991-2002).
- Strobel, A. *Der erste Brief an die Korinther* (ZBK6.1; Zürich: Theologischer Verlag, 1989).
- Thiselton, A.C. *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 2000).
- Witherington III, B. *Conflict & Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995).
- Wolff, C. *Der erste Brief an die Korinther* (ThHKNT 7; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1996).

b. 個別研究

- Bassler, J.M. "God in the NT," *ABD* 2. 1049-1055.
- Beker, J. Ch. *Paul the Apostle: The Triumph of God in Life and Thought* (Philadelphia: Fortress, 1980).
- Berger, K. *Theologiegeschichte des Urchristentums* (2. Aufl.; Tübingen: Mohr., 1995).
- Betz, H.D., "θεός," *EWNT* 2. 346-352.
- Bultmann, R. *Theologie des Neuen Testaments* (9. Aufl. durchgesehen und ergänzt v. O. Merk; Tübingen: Mohr, 1984).
- Coppens, J. (ed.). *La notion biblique de Dieu: Le Dieu de la Bible et le Dieu des philosophes* (BETHL 41; Louvain: Louvain University Press, 1976).

- Delling, G. "Geprägte partizipiale Gottesaussagen in der urchristlichen Verkündigung," ders., *Studien zum Neuen Testament und zum hellenistischen Judentum* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1970) 401-416.
- Demke, Ch. "Ein Gott und viele Herren," *EvTh* 36 (1976) 473-484.
- . "Gott IV. Neues Testament," *TRE* 13. 645-652.
- Gnilka, J. *Theologie des Neuen Testaments* (Freiburg, Basel und Wien: Herder, 1994).
- Goulder, M.D. *Paul and the Competing Mission in Corinth* (Peabody, MA: Hendrickson, 2001).
- Haag, E. (ed.). *Gott der Einzige. Zur Entstehung des biblischen Monotheismus* (QD 104; Freiburg, Basel, und Wien: Herder, 1985).
- Hahn, F. *Theologie des Neuen Testaments* (2 Bände; Tübingen: Mohr, 2002).
- Hengel, M. "Mors turpissima crucis. Die Kreuzigung in der antiken Welt und die »Torheit« des Wortes vom Kreuz," in *Rechtfertigung* (FS. E. Käsemann; Tübingen: Mohr, 1976) 125-184 (=土岐正策・土岐健治訳『十字架: その歴史的探求』ヨルダン社, 1983年).
- 原口尚彰『パウロの宣教』教文館, 1998年
- Hübner, H. *Biblische Theologie des Neuen Testaments* (3 Bände; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990-1995).
- Hurtado, L. *One God, One lord: Early Christian Devotion and Monotheism* (2nd ed.; Philadelphia: Fortress; Edinburgh: T. & T. Clark, 1988).
- Kammler, H.-Ch. *Kreuz und Weisheit* (WUNT 93; Tübingen: Mohr, 1997).
- Klauck, H.-J. *Monotheismus und Christologie. Zur Gottesfrage im hellenistischen Judentum und im Urchristentum* (QD 138; Freiburg, Basel, und Wien: Herder, 1992).
- Kleinknecht, H. "θεός," *ThWNT* 3.65-120.
- Klumbies, P.-G. *Die Rede von Gott bei Paulus in ihrem zeitgeschichtlichen Kontext* (FRLANT 155; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992).
- Kuhn, H.W. "Kreuzesstrafe während der frühen Kaiserzeit. Ihre Wirklichkeit und Wertung in der Umwelt des Christentums." *ANRW* II 25. 1, 648-793

- Kümmel, W.G. "Die Gottesverkündigung Jesu und der Gottesgedanke des Spätjudentums," ders., *Heilsgeschehen und Geschichte. Gesammelte Aufsätze 1933-1964* (Marburg: Elwert, 1965) 107-125.
- Lang, B. *Monotheism and the Prophetic Minority* (Sheffield: Almond Press, 1983).
- _____. "Zur Entstehung des biblischen Monotheismus," *ThQ* 166 (1986) 135-142.
- Liftin, D. *St Paul's Theology of Proclamation: 1 Corinthians 1-4 and Greco-Roman Rhetoric* (SNTSMS 79; Cambridge: Cambridge University Press, 1994).
- Lindemann, A. "Gott. III. Neues Testament," *RGK* 4. 1103-1108.
- _____. "Die Rede von Gott in der paulinischen Theologie," ders., *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr, 1999) 9-26.
- Merklein, H./E. Zenger (eds.). *»Ich will euer Gott werden«. Beispiele biblischen Redens von Gott* (SBS 100; Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1981).
- 宮田 玲「シエマーにおける「一」(エハド)の理解」『基督教研究』第65巻(2004年) 87-106頁
- Moxnes, H. *Theology in Conflict: Studies in Paul's Understanding of God in Romans* (Leiden: Brill, 1980).
- Popkes, W./R. Brucker. *Ein Gott und ein Herr. Zum Kontext des Monotheismus im Neuen Testament* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2004).
- Rad, G. von. *Theologie des Alten Testaments* (2 Bände; München: Kaiser, 1960-1962).
- Richardson, N. *God in the New Testament* (London: Epworth, 1999).
- _____. *Paul's Language about God* (JSNTSup 99; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994).
- Schelkle, K.H. *Theologie des Neuen Testaments* (4 Bände; München: Patmos, 1968).
- Schrage, W. "Theologie und Christologie bei Paulus und Jesus auf dem Hintergrund der modernen Gottesfrage," *EvTh* 36 (1976) 121-154.
- Scullion, J.J. "God in the OT," *ABD* 2. 1041-1048.
- Stuckenbruck, L.T. and W.E.S. North, eds. *Early Jewish and Christian Monotheism*. JSNTSup 263; London: T. & T. Clark International, 2004.

- Stuhlmacher, P. *Biblische Theologie des Neuen Testaments. Band 1 Grundlegung: Von Jesus zu Paulus* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992).
- Thüsing, W. *Per Christentum in Deum. Studien zum Verhältnis von Christozentrik und Theozentrik in den paulinischen Hauptbriefen* (NTABII; 3. verarbeitete und erweiterte Aufl.; Münster: Achendorf, 1986).
- _____. *Das Wort vom Kreuz* (WUNT 93; Tübingen: Mohr, 1997).
- Vos, F. *Das Wort vom Kreuz und die menschliche Vernunft. Zur Soteriologie des 1. Korintherbriefes* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002).
- Weder, H. *Das Wort Jesu bei Paulus. Ein Versuch, über den Geschichtsbezug des christlichen Glaubens nachzudenken* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981).
- Wilckens, U. *Theologie des Neuen Testaments* (Bd.1/1-3; Neukirchen Vluyn: Neukirchener Verlag, 2002 2005).
- Zimmerli, W. "Gott in der Verkündigung der Propheten." in J. Coppens, (ed) *La notion biblique de Dieu: Le dieu de la Bible et le Dieu des philosophes* (BETHL 41; Louvain: Louvain University Press, 1976) 127-143.